
将来に向けたドイツ語教育の検討 ― ドイツ語圏の「今」を知り、新しい教授法や技術媒体を用いた学習ツールを検証する

研究代表者 今井 敦
共同研究者 國重 裕
佐藤 和弘

目的と方法

龍谷大学のドイツ語授業はその 8 割以上が非常勤講師によって担われている。非常勤講師は他大学での授業担当もあるため、ペア授業に関するメールでの相互連絡や成績会議での意見交換はなされてきたものの、相互間また専任教員との間で、ドイツ語教授法やドイツ語圏事情等に関する情報交換の場が不足していた。当プロジェクトの目的は、非常勤講師を含むドイツ語授業担当者のあいだでドイツ語圏の最新情報、様々な教授法、AI や youtube など新しいメディアを活用した教材、これまでの教授経験などについて意見交換することで、より魅力的でアップデートされた授業を実現すると同時に、共同での教材や教科書等の開発・作成を将来的な視野に入れながら、相互の信頼を醸成、授業担当者の技量アップを図ることであった。

当 FD プロジェクトにおいては、授業担当者の定期的な情報交換の場を設けた。具体的には、主に昼休みの時間を使い、ドイツ語授業担当者が集まって昼食を取りながら、各回一人が発表する報告会を開催した。できるだけ多くの非常勤講師に参加してもらうため、昼休み開催の際には各回できるだけ曜日を変えて開催、参加できない担当者のため、前后期の採点会議前にも開催した。

ドイツ語教育をめぐる現状と当 FD プロジェクトの意義

現今、IT 産業の伸張、とりわけ AI 技術の発達によって外国語修得に新しい可能性がもたらされると同時に、そうしたものへの誤解を含む過度な期待もあって、外国語の授業運営・修得には困難も生じている。様々な新しい技術・メディアは実際のところ外国語修得によりよい成果を齎しているのかと問い、四半世紀前と現在の学習者の到達レベルを比べたとき、残念ながら目に見えてよくなっているとは言えず、むしろ自動翻訳等への依存やこの分野における技術開発への楽観的先入観が、自らの能力を磨くという基本的学習意欲を殺いでしまっている面は無視できない。教える側には IT 等への抵抗感、苦手意識もあるため、どのように活用できるのか、自ら体験して長所短所を見極め、経験を交換する場が必要であった。

コロナ禍を経たあともウクライナ、ガザ地区、イランでの戦争があり、ヨーロッパにおける物価高や円の暴落も影響し、ドイツ語圏は一時期に比べ渡航しにくい地域となっ

まった。しかし、このようなときにこそ、今の状況を自らの目で見、現地の人々とのコミュニケーションを通じた実体験は非常に重要であり、経験を教員間で共有する場を設けることには、大きな意味がある。

ドイツ語の場合、上記の情勢ゆえに担当者としてネイティブスピーカーを確保することが極めて困難となったが、一方、Deutsche Welle などドイツ語圏の各放送局、Goethe-Institut、YouTube 等が提供する語学コースや学習アプリなど、メディア環境の激変によって、ネイティブが発音した生のドイツ語を聞くことは極めて容易となっている。それらをどのように活用していくべきか、今回の FD において、授業担当者が自ら試行し、報告し、意見交換することは大変重要であった。ドイツ語圏で開発・作成された教材も多岐にわたっているが、音声や動画付きが主となっている。予算がついたことで、非常勤講師には手に届きにくいこうした教材を手にとることができた。

各回のトピックと具体的内容

トピックとしては、ドイツ語圏諸国の最新情報（渡航経験）、自らのドイツ語授業の工夫を紹介、教材を使ってみた経験、AI 語学学習アプリを使いその長所・短所について学生とともに検証した結果の報告、発表ではないが、YouTube やドイツ語圏の放送局・語学学校等が提供するオンラインドイツ語コースの視聴経験等も話題となった。

以下、各発表者による発表内容の要約を掲載する。

第1回：5月30日（金）昼休み

場所：灯炬館（2号館北側）4階401会議室

○趣旨説明（今井）

○発表：今井敦「ドイツ語圏の市内交通 ―ウィーンを中心に―」

はじめに当 FD プロジェクトについて趣旨説明したあと、ドイツ語圏に関する情報として、市内交通をトピックにして報告した。

ドイツ語圏の都市交通に関して、（1）公共交通手段と（2）道路交通という二つの観点から、日本の都市と比較した。具体例として、特に市内交通の利便性・公共性の評価が高いオーストリアのウィーン市を紹介し、日本の都市（京都市など）と比較した。（1）公共交通に関しては、日本の場合、採算性を重視したなかでの公共性維持が目指され、各鉄道会社、バス会社等が別々の料金体系を持つ。それは出発地から目的地への線的な（距離による）料金体系であり、定期券や、子供や老人など弱者に対する割引率の低さも顕著である。対してドイツ語圏の都市では公共性が重視され、市からの公的資金の投入が手厚い（ウィーン市の場合、通常経費の40%は市によって賄われ、新路線敷設や新車両購入など、インフラ整備も市の負担である）。ほぼ凡ての交通手段が一つの運営会社のもとにあり、交通手段間の乗換えは自由で、ゾーンごとの料金設定、すなわち、面による料金体系である。特に子供の無料期間が長く（6歳まで完全無料。15歳まで土・日・祝日と学校の長期休暇中無料）、シニアや学校の児童・生徒、学生に対して、また通常の間定期も割引率が非常によい。誰にとっても便のよい、特に弱者にやさしい公共交通と言える。（2）自動車や自転車、歩行者といった道路交通に関しても、ヨーロッパにおける交通静穏化対

策（速度・交通量のコントロール）は線ではなく、面によるものである。ドイツ語圏では「ゾーン 30」や、より静穏化効果の高い「コミュニティ道路」が 80 年代 90 年代から既に普及しており、「ゾーン 30」はもはや時代遅れとなっているのに対し、日本の場合、「ゾーン 30」の地域も少なく、「コミュニティゾーン」に関してはごく一部の自治体で稀に見られる程度となっている。歩行者天国や自転車レーン・専用道の整備に関しても同様で、日本の道路交通全般に言えることは、交通量の増大に比して、静穏化対策の遅れである。

第 2 回：6 月 13 日（金）昼休み

場所：灯炬館（2 号館北側）4 階 401 会議室

○ 発表：大松佳代子「今年度の授業中の試みについて — ICT・AI との組み合わせから」
はじめに、「紆余曲折」の 20 年だった今までの自分の授業を振り返り、各種ワークショップや DLL (Deutsch Lehren lernen) 勉強会、海外教員研修 (Goethe-Institut) に参加した際の経験を報告し、FD の参加者と意見交換した。現在の授業プランとしては、音読必須で特に 4 月は長めに音読を行っていること、学生の自律学修を促すため教員の説明を抑えて学生同士の話し合いの時間を多めに確保している。授業を活気づけるため、*youtube* や学習アプリ *Quizlet* や *Kahoot!* も取り入れていることを、実際の授業風景の具体例を挙げながら報告した。今後も FD の会がささいなことでも相談できる教授法共有の場となることを期待している。

第 3 回：6 月 24 日（火）昼休み

場所：灯炬館（2 号館北側）4 階 401 会議室

○ 発表：馬場綾香「ドイツ語教材としてのグリム・メルヒェン」
グリム童話をドイツ語教材、特にリーディング教材として見た場合の難点とこれまで発表者の試みた工夫点について発表した。グリム童話の原文には接続法や副文などが多用されており、初級者には文法的に難易度が高い。そのため、授業では平易に加工したテキストを使用した。また近年はデジタルツールの発展により和訳を課すだけでは読解力の訓練になりにくいと、追加の練習問題なども必須であると考えられる。

第 4 回：2025 年 7 月 10 日（木）昼休み

○ 発表：永井達夫「授業のランデスクンデで使う写真教材について」

発表者は、履修者のモチベーション維持のために、ドイツ語の授業で積極的にランデスクンデを取り入れてきた。ランデスクンデとは、その国、その地方に関する、歴史・地誌・生活様式などの背景知識のことである。授業ではただ単にそれらを言葉で説明するのではなく、できるだけ写真や動画など視覚教材を使うようにしている。それらを使うときには著作権に留意しなければならない。そこで発表者は、授業で使う写真を撮るため、2023 年 3 月に約 3 週間ドイツに滞在した。今回の FD では実際に撮影した写真の一部を紹介した。

第 5 回：8 月 1 日（金）3:00 ~ 4:30PM（採点会議前）

○ 発表：エドワルド・ポルドゥニャク「教材としてのフリッツ・ラング監督映画作品について」

映画を用いたドイツ文化講義においてどのような授業を行っているかを報告した。発表者は自身が 20 世紀前半の古典的なドイツ映画作品、特にフリッツ・ラング作品を扱う際、—— 例えば『メトロポリス』(1927) のような SF 映画を扱う場合には —— この映画が、

製作された当時の社会主義運動全盛の風潮とどのような関係にあったのか、そしてそれがジブリの SF 映画作品などとどのような映画史的文脈を共有するのかを説明し、学生にとって馴染みのあるサブカルチャーなどに引き付けて講義をすることを心掛けていることを報告した。

第 6 回：10 月 24 日（金）昼休み

○ 発表：山下大輔「AI 学習アプリを用いた語学学習についての意識調査」

ドイツ語の授業の受講生を対象として行った、AI 語学学習アプリに関する考えや使用状況についての調査結果を共有した。授業に Talkpal などの AI 語学学習アプリを取り入れる可能性を検討するため、発表者が受け持つドイツ語の受講生らに「Talkpal」の無料枠を一週間試しに利用してもらった（自由参加）上で、アンケートを実施し上記の意識調査を行った。アンケートの質問項目としては、語学学習アプリのこれまでの使用歴や、使用するあるいは使用しない理由、アプリ学習のメリット、デメリットなどを含めた。その結果、受験期にアプリを使用していた受講生が多いことや、意外に教科書などの紙媒体での学習を好む者が多いこと、新たな語彙の習得のためにアプリ学習にメリットを感じている者が多いことなどが明らかになった。FD での発表ではこれらの内容を共有し、アプリを用いた効果的な学習方法について意見交換を行った。

第 7 回：11 月 28 日（金）昼休み

○ 発表：田中直「ドイツにおけるオオカミ『ドイツに行ってみませんか？』Lesson8 の内容から」

本報告では、教科書『ドイツに行ってみませんか』Lesson 8 を手がかりに、ドイツにおける狼の歴史や現状、そして物語におけるイメージについて考察した。教科書では、グリム童話によって形成された「危険な動物」としての狼のイメージと、実際には人を襲うことのない狼という現実の間に大きな差があることが示されている。ドイツでは 18～19 世紀に家畜保護のため狼が駆除され、1904 年に絶滅した。しかし 1980 年代以降の保護政策やドイツ統一の影響により、2000 年代から再繁殖が確認され、現在では約 1600～2500 頭が生息しているとされる。一方で家畜被害などの問題も生じ、保護と管理の両立が課題となっている。物語では狼は悪の象徴とされがちだが、グリム童話全体では悪役として登場する例は 2 話と少ない。また日本では狼は神の使いとして崇められてきた存在であり、西洋とは異なるイメージが形成されている。このように狼の認識は、歴史や社会、文化によって形成されるものであり、日独比較の観点からも興味深いテーマである。

第 8 回：2026 年 1 月 27 日（火）3:00 ～ 4:00PM（採点会議前）

○ 発表：永井達夫「IT/AI 活用の授業について」

発表者は 1991 年度より龍谷大学でドイツ語の授業を担当してきた。発表者はすでに 90 年代の前半からパーソナルコンピュータやインターネットを授業に活用し、情報処理室などを普通の教室として使ってもきた。当 FD では、発表者が今年度で龍谷大学を退職することもあって、その IT 活用の授業の総括をおこなった。どんな成果があり、どんな問題点が残ったのか。また IT の延長上にある現在の AI は、今後のドイツ語、またさらに語学学習において、いかなる可能性を秘めているのか。発表者はそれらの論点にそって具体的な例を説明した。

第 9 回：2026 年 1 月 27 日（火）4:00 ～ 4:30PM（採点会議前）

○ 発表：佐藤和弘「ドイツ語教育と環境教育」

ドイツが環境先進国と言われる所以は、ドイツの基本法第 20a 条（日本の憲法にあたるもので「次世代のために自然を守る責任がある」という趣旨の条文が明記されている）に基づいた環境教育を通して「環境保護意識」が構築されているからである。ドイツの環境教育においては「環境教育の教科」が設けられているのではなく、各教育科目の中に取り入れられ実践されている。このようなドイツの環境教育のあり方に鑑み、龍谷大学のドイツ語教育の一環として、環境用語、エコロジー、エネルギー政策、ドイツ語圏メディアの言語表現などをキーワードとしたドイツ語教材を作成し、学生たちがドイツ語を学びながら自ら環境意識を育んでいくことの可能性を模索した。

成果と今後の展望

25 年度中に関しては、各発表者と参加者がドイツ語圏について、あるいはドイツ語教授法についての知識・スキルを一つ以上のトピックにおいて増進することを具体的到達目標として設定したが、年度中の発表者・参加者の場合、この目標は十分達成されたと受け止めている。

初年度である 25 年度の活動で足りなかった点としては、非常勤担当者のうち、時間的に都合の合わない人たちの発表や参加を得ることができなかった点が挙げられる。龍谷大学としてどのようなレベルのどのような授業を目指すのか、授業運営に関して共通理解を醸成することは、学生のモチベーション促進にもつながり、よりよい学習成果が期待できるため、より多くの参加が得られるよう、次年度は開催時間や曜日を工夫したい。

また、初年度ということもあり、トピック間にあえて直接的繋がりは求めず、各発表者が自由なテーマで報告会を開催してきた。今後の展望としては、新たに担当者として加わる非常勤講師や、休業明けとなる専任教員も含め、さらに報告会を重ねていくことによって、龍大生に合った独自のドイツ語教育のあり方についての議論を深め、将来的には 3 年後程度を目途に、新しい共通教材作成を視野に入れた会へと発展させたい。